

美術や美術文化と豊かに関わる資質・能力の育成 ～造形的な見方・考え方が働く授業の実践～

古閑 健育

1 美術科が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは

本校美術科が目指す「夢中になって問い続ける生徒」とは、次の①～③のような生徒だと考えています。①主体的に美しいものやよりよいものを求め続ける生徒、②創意工夫し表現していく生徒、③自分としての意味や価値を創りだしたりしていく生徒です。

① 主体的に美しいものやよりよいものを求め続けていく生徒

主体的に美しいものやよりよいものを求め続けていく生徒とは、美しいものやよりよいものにあこがれを持ち、新しい意味や価値を創りだしたいという意欲を持って主体的に取り組む生徒です。また、こういった意欲があることで、授業内だけで閉じられることなく、生活や社会の中で美術を生かし、心潤う生活を創造しようとする生徒につながっていきます。

② 創意工夫し表現していく生徒

創意工夫し表現していく生徒とは、生徒自身が表現したいと考えた意図に応じて、学んだ技能を応用したり、工夫を繰り返したりしながら自分なりの表現方法を見つけ出し表現していく生徒です。創意工夫し表現していく過程では、生徒が他者から認められ、満足感や自信を持ち、挑戦しがいのある楽しい活動であるということを実感していきます。これにより、更に美しい、面白い表現をするために、知識や技能を高めようとする生徒につながっていきます。

③ 自分としての意味や価値を創りだす生徒

自分としての意味や価値を創りだす生徒とは、表現の活動では、強く表したいことを心の中に思い描き、人とは違う、自分独自の発想や構想を生み出す生徒です。鑑賞の活動では、自分の見方や感じ方を大切にしながら、主体的に身の回りにある美術や美術文化と関わり、自分の中に新しい意味や価値をつくりだす生徒です。自分の考えを中心に持ち、新しいものを創造していくことができれば、そこに喜びが生まれます。また、その喜びは、次の新しいものを創ろうとするきっかけにつながります。

2 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するために

(1) 教科の本質について

「夢中になって問い続ける生徒」を育成するためには、教科の本質に迫る深い学びが欠かせません。本校美術科では、教科の本質を「造形的な見方・考え方を、感じとる・考える・創る活動の中で働かせながら学んでいくこと」と捉え、その本質に迫る授業を目指しました。「感じとる・考える・創る活動」とは、美術の創造活動を本校美術科なりに焦点化したものです。この教科の本質に迫る授業を行っていくことで、「夢中になって問い続ける生徒」の育成を目指しています。

(2) 「夢中になって問い続ける生徒」を育成するための題材の工夫及び教師の手立て

3年生で取り組んだ題材を具体例として挙げながら紹介していきます。題材名は「今の社会だから生まれた～想像の生物～」です。これは、アマビエが広まった社会現象からヒントを得て考えた題材です。「世の中に数多くある社会問題に対して自分なりの課題意識を持ち、そこに未知の生物が生まれるとしたら」と仮定し、生徒に想像の生物を創造させていきました。

① 主体的に求め続けていく生徒（生徒の問いを大切にしたり関わり方）

生徒が主体的に課題解決をしていくために、「なぜ?」「どうやって?」といった生徒の問いに寄り添いながらも、むやみに答えを与えないようにしています。また、生徒の思いを引き出し、自身の力で答えにたどり着けるように導く立場であることを心がけています。作品が完成することや、作者の思いを読み取り寄り添えることで味わう喜びは大切です。しかし、よりよいものを目指していくためには、造形的な「見方・考え方」を磨き、自己解決力を高めることの方が大切です。3年生では特に、既習内容が多くあるため、造形的な「見方・考え方」を他の題材と関連付けたり、比較させたりしながら取り組めるように心がけています。

② 創意工夫していく生徒（生徒が自分なりの表現方法を見つけ出していくための工夫）

形や色などから伝わるイメージを知識として持ち、体験しながら技能を身につけ、生徒自身が思い描くイメージに向かって、「どうすれば」という問いを持ちながら表現を工夫していく生徒の姿を目指しています。そのために、表現と鑑賞を関連させ、「感じとる・考える・創る」活動を行うようにしています。この活動を繰り返すことによって、生徒がイメージする思いに、より近付いた表現ができるようになっていきます。また、教師が学習のポイントを明確にし、何を意識して取り組めばいいのかを生徒に示すことで、生徒の造形的な「見方・考え方」が働き、学びの方向性が定まっていきます。今回取り組んだ題材では、想像の生物のイメージを具体的に持たせ、そのイメージに合うような形や色、質感などを目指せるように、表現例を掲示し参考にできるようにしました。また、闇雲に試すのではなく、表したい思いを生徒の中にしっかり持たせて試させることで、探究していく生徒が多く見られました。**資料**は、怖い印象の目を目指して、色々と試みている生徒の画用紙です。



資料 生徒の試し

③ 意味や価値を創りだす生徒（生徒が考えを広げ、自分としての意味や価値を創っていくための工夫）

美術の創造活動では、決められた答えがありません。だからこそ、生徒自身が答えを創っていく必要があります。その答えを創るためには、造形的な視点が欠かせません。また、造形的な視点が豊かになれば、これまで以上に、今まで気付かなかったことに気付いたり、よさや美しさなどを感じ取ったりすることができるようになります。ひいては、創ることができる答えも多種多様になっていきます。そのため、自分の考えだけに終始するのではなく、友達が多様な考えを聞かせ、「見方・考え方」を広げられるようにしています。今回取り組んだ授業では、河童の例から、川に住んでいる根拠を探させ、生徒同志で意見交換させながら、形や色などの造形的な要素が重要だということを感じとらせました。また、多様な表現のアマビエを鑑賞することで、イメージを表現するための効果的な要素も学びとっていました。これらの学びから、「私の生物は何処にいるのか」「どのような形、色が合うか」などといった問いを持ち、様々な要素を生徒は組み合わせて作品に生かし、生徒独自の想像の生物が生まれてきました。

<主な参考文献>

文部科学省：中学校学習指導要領解説美術編，2018

東良雅人：中学校美術科、高等学校芸術科(美術、工芸)における「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善／中等教育資 11月号 No.1002, 文部科学省教育課程課編集, 2019

美術出版社：美術手帖 No.1074, 2019.02

熊本大学教育学部附属中学校：令和元年度研究紀要, 2019